

マルコ 7 : 24-8 : 10 「イエスは異邦人の救い主でもある！」

7:24 イエスは、そこを出てツロの地方へ行かれた。家に入られたとき、だれにも知られたくないと思われたが、隠れていることはできなかった。7:25 汚れた霊につかれた小さい娘のいる女が、イエスのことを聞きつけてすぐにやって来て、その足もとにひれ伏した。7:26 この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキヤの生まれであった。そして、自分の娘から悪霊を追い出してくださるようにイエスに願い続けた。7:27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」7:28 しかし、女は答えて言った。「主よ。そのとおりです。でも、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます。」7:29 そこでイエスは言われた。「そうまで言うのですか。それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」7:30 女が家に帰ってみると、その子は床の上に伏せており、悪霊はもう出ていた。7:31 それから、イエスはツロの地方を去り、シドンを通して、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に来られた。7:32 人々は、耳が聞こえず、口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださるよう、願った。7:33 そこで、イエスは、その人だけを群衆の中から連れ出し、その両耳に指を差し入れ、それからつばきをして、その人の舌にさわられた。7:34 そして、天を見上げ、深く嘆息して、その人に「エパタ」すなわち、「開け」と言われた。7:35 すると彼の耳が開き、舌のもつれもすぐに解け、はっきりと話せるようになった。7:36 イエスは、このことをだれにも言うてはならない、と命じられたが、彼らは口止めされればされるほど、かえって言いふらした。7:37 人々は非常に驚いて言った。「この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない者を聞こえるようにし、口のきけない者を話せるようにされた。」

8:1 そのころ、また大ぜいの人の群れが集まっていたが、食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼んで言われた。8:2 「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。8:3 空腹のまま家に帰らせたなら、途中で動けなくなるでしょう。それに遠くから来ている人もいます。」8:4 弟子たちは答えた。「こんなへんぴな所で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができましょう。」8:5 すると、イエスは尋ねられた。「パンはどれぐらいありますか。」弟子たちは、「七つです」と答えた。8:6 すると、イエスは群衆に、地面にすわるようにおっしゃった。それから、七つのパンを取り、感謝をささげてからそれを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。8:7 また、魚が少しばかりあったので、そのために感謝をささげてから、これも配るように言われた。8:8 人々は食べて満腹した。そして余りのパン切れを七つのかごに取り集めた。8:9 人々はおよそ四千人であった。それからイエスは、彼らを解散させられた。8:10 そしてすぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌタ地方へ行かれた。

導入

マルコ 4 章の種を蒔く人のたとえは、イエスがどういうお方であるかを理解し、イエスの教える理解することの必要性を教えてください。(マルコ 4 : 11-13)

イエスは、しっかりと聞かならばさらにイエスご自身について明らかにされると教えておられます。

一方、イエスの教えるを敢えて拒絶するなら、裁かれます。(4 : 24-25)

パリサイ人と呼ばれるユダヤの宗教指導者たちは、イエスの教えるを敢えて受け入れませんでした。(3 : 6)

先月学んだ 7 : 1-23 で、イエスは、パリサイ人の問題が罪深い心にあることを示されました。

イエスがパリサイ人の問題について説明なさった個所から、それがパリサイ人に限ったことではなく、人類の普遍的な問題であることがわかります。(7 : 21-23)

弟子たちは、イエスの教えるを理解できないでいました。(7 : 18)

ここで、「罪深い人間の心を変えられることはあるのか」という疑問が湧きます。

それは、どのようにして起こるのでしょうか。

イエスがどういうお方であるか、人はどのようにして悟るのでしょうか。

7 : 24-8 : 10 から、これらの問いに対する答えを導き出します。

その学びに入る前に、先月、イエスが預言者イザヤのことばを引用したことを思い出していただきたいと思います。

マルコ 7 : 6-7

7:6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。 7:7 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』

旧約聖書のイザヤ書 29 : 14-20 を読むと、マルコのこの個所が、イザヤの預言の成就であることがわかります。

イザヤ書 29 : 14-20

29:14 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び不思議なこと、驚き怪しむべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」 29:15 ああ。【主】に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らはやみの中で事を行い、そして言う。「だれが、私たちを見ていよう。だれが、私たちを知っていよう」と。 29:16 ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかった」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ」と言えようか。 29:17 もうしばらくすれば、確かに、レバノンが果樹園に変わり、果樹園が森とみなされるようになる。 29:18 その日、耳の聞こえない者が書物のことばを聞き、目の見えない者の目が暗黒とやみから物を見る。 29:19 へりくだる者は【主】によっていよいよ喜び、貧しい人はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。 29:20 横暴な者はいなくなり、あざける者は滅びてしまい、悪をしようとうかがう者はみな、断ち滅ぼされるからだ。

イザヤがこの個所で語ったことすべてが、マルコの個所でイエスによって成就されました。

では、今日の個所の学びを始め、今日私たちが聖餐式に与る前に神が教えようとしておられることは何か見ていきましょう。

7 : 24 から 8 : 10 には、異邦人の地で起こったイエスの 3 つの奇跡について記されています。

イザヤは、イザヤ 49 : 5-6 で、メシヤが異邦人に光をもたらすと預言しています。

イザヤ書 49 : 5-6

49:5 今、【主】は仰せられる。——主はヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた。私は【主】に尊ばれ、私の神は私の力となられた。—— 49:6 主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」

この個所を解釈する上で覚えておかなければならないことがあります。それは、イエスが異邦人の地域に入られたのが、非常に過激な行動であったということです。

また、イエスはこれらの奇跡をとおして弟子たちに何かを教えておられるということも念頭に置いておく必要があります。

イエスは、意図的に異邦人に働きかけておられるのではありません。それは、後に使徒の働きで見られるパウロの使命です。

弟子たちは、イエスがふさわしくない場所で何をなさっているのかなかなか理解できませんでした。

何の目的でイエスがそのようなことをなさったのか、わかりませんでした。

弟子たちの疑問に対する答えは、旧約聖書のみことばの中にあります。

私たちにも同じことが言えます。

イエスが私たちの生活の中で何かをなさったり、私たちが納得できないようなことが起こるのを許されたりするとき、イエスは私たちに何かを教えようとなさっているのだということを知っておく必要があります。

それは、私たち自身についての教えかもしれませんし、そのような状況でイエスを信頼することかもしれません。

イエスは、私たちに無駄な人生経験を積ませることはなさいません。私たちがイエスの御前に心を開いて謙虚であるなら、イエスはいつも私たちに新しいことを教えてください。そして、イエスを信じる信仰の新たな高みへと導いてくださいます。

この箇所には、3つの奇跡が登場します。

1. 異邦人の女の信仰 (7: 24-30)
2. 耳の聞こえない人の癒し (7: 24-30)
3. イエスが7つのパンで4千人に食事をお与えになる。 (8: 1-10)

1. 異邦人の女の信仰 (7: 24-30)

異邦人の女がイエスのもとに来て、娘から悪霊を追い出してくださいと何度もお願いします。それに対するイエスの答えは、私たちには奇妙に思えます。

これは、意味が隠されたたとえの一種です。

女を叱っているようにも聞こえます。

その女の娘から悪霊を追い出すのを断っているようにも取れます。

しかし、女のイエスに対する返答から、イエスの発言の意味を女が理解していたことがわかります。

29節で、イエスは女が理解したことを褒めておられます。そして、その結果、イエスは女の娘から悪霊を追い出されました。

この箇所をはっきり理解するためには、同じ出来事について記すマタイ 15: 21-28 を読む必要があります。

マタイ 15: 21-28

15:21 それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。 15:22 すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」 15:23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです」と言ってイエスに願った。 15:24 しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。 15:25 しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください」と言った。 15:26 すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです」と言われた。 15:27 しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」 15:28 そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直った。

マタイの箇所から、イエスがまずイスラエルの民のために遣わされたことがわかります。

だから、イエスはこの女の願いを聞き入れられませんでした。

しかし、イエスは異邦人の土地におられました。

この女は、どういうわけか、イエスのおっしゃったことを理解しました。

ユダヤ人の家では、食事の時にまず大人に料理を出します。その後に子ども、そして最後に犬です。

この女がイエスから悟ったことは、最終的には犬にも食事が与えられるということです。

だから、女はイエスにお願いするのをやめませんでした。

もうひとつ、この女がイエスに願い続けた理由があります。それは、イエスの話し方です。

当時、「犬」という言葉はユダヤ人の間で「異邦人」を指して使われました。
この時代、犬はペットではありませんでした。
たいていの場合、ユダヤ人は差別的な意味を込めて異邦人を「犬」と呼びました。
では、なぜイエスがそのような言葉を使われたのでしょうか。
その答えは、ヘブル語から最初に訳された原語のギリシャ語を見ればわかります。
ここで、イエスは「犬」を意味する通常の単語を使っておられません。
とても親しみがあって人懐こい犬を指す単語を使っておられます。
イエスは犬という言葉を使われましたが、それでも、イエスの愛が女に伝わるかたちで語られた
のです。
女はイエスをすっかり信じていたので、イエスがしてくださることなら何でも喜んで受け入れま
した。
しかも、自分の癒しや解放を求めていたのではありません。娘のためにイエスにお願いしていた
のです。
この奇跡から得られる信仰の教えは何でしょう。
マタイの福音書の話で、イエスはこの女について褒められることが他にもあったでしょう。
例えば、知恵や忍耐です。けれども、イエスは彼女の「信仰」を褒められました。
イエスというお方を信じ、イエスが奇跡を起こす力をお持ちだと信じた信仰に、イエスが報いて
くださったのです。
これは、私たちも同じです。
私たちの人生で奇跡を起こされることが神のみこころであるなら、それをイエス・キリストを信
じる信仰によっていただかなければなりません。
聖書はペテロ第二 3 : 9 で、神は私たちに対して忍耐深くあられ、ひとりでも滅びることを望まず、
すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる、と語ります。
ひとりでも滅びることは神のみこころではないのです。すべての人がイエスをとおして永遠のい
のちを得ることが神のみこころです。
ですから、永遠の救いがすべての人に対する神のみこころであることがわかります。
けれども、その救いを得るためには、私たちはイエスのもとに来て、イエスを信じなくてはなり
ません。
イエスが人の姿をした神であり、この世に来られ、2000 年前に十字架上で私たちの身代わりとし
て死ぬことによって、私たちの救いを確かなものとしてくださったということを心から信じなけ
ればなりません。
神は私たちの心をご存じです。イエスを信じる私たちの信仰が真剣なものかどうかもお見通しで
す。
私たちの人生で奇跡を起こされることが神のみこころであるなら、そうすることがおできになり
ます。
イエスが流してくださった血を根拠に神に助けを求めるなら、私たちを罪から救うことが神のみ
こころです。
けれども、病気の癒しなど、個人の特定の事柄に関する奇跡は、信仰をもって祈り求めることは
できますが、その答えがどのようなものであっても、主権者なる神のみこころを信頼する必要が
あります。

2. 異邦人に対するふたつめの奇跡は、耳の聞こえない人の癒しでした。(7 : 31-37)

イザヤ書 35 : 4-6

35:4 心騒ぐ者たちに言え。「強くあれ、恐れるな。見よ、あなたがたの神を。復讐が、神の報い
が来る。神は来て、あなたがたを救われる。」 35:5 そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の
聞こえない者の耳はあく。 35:6 そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者
の舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。

マルコは、この出来事とイザヤの 35 : 4-6 の預言を結びつけています。

この出来事は、イエスが約束されたメシヤであることをさらに確証づけます。マルコはそのことを読み手に理解してほしいと願っています。

まず、この男性の状態に注目しましょう。

この男性は耳が聞こえず、舌のもつれた人でした。

生まれつき耳が聞こえないのであれば、しゃべり方がわからないでしょう。

ですから、この人の場合は、病気か事故で耳が聞こえなくなったようです。

そうであれば、話していた記憶はあっても、うまく話すことができないようになります。

このような状態は、きっとこの男性をよけいに苦しめたでしょう。

男性は明らかにしゃべろうとしますが、人はその言葉を理解できないのです。

家族や親しい友人を除いては、ほとんどの人はこの男性に同情的ではなかったかもしれません。

33 節で、イエスがこの男性を群衆の中から連れ出されたとあります。

ご自身の奇跡を公衆の面前で見世物にするつもりはなかったのでしょうか。ただこの人のために奇跡を起こすことを望まれました。

この人が人々から受け入れられていないことをイエスはご存じでした。けれども、イエスはこの人を受け入れておられます。

この奇跡で、イエスは奇妙なことをなさいます。

男性の耳に指を入れ、つばをかけてその人の舌に触られました。

この男性をイエスのもとに連れてきた友人たちの信仰によって、奇跡が起こされましたが、イエスは、この男性自身にも、何が起きているのかを知ってほしいと望まれました。

イエスは、この男性が当事者になることを望まれました。それを触ることをとおして伝えられたのです。

これからイエスが耳と口を癒される、ということを明らかになさいました。

イエスは天を見上げられました。神の御力を願い求められたのでしょうか。するとすぐに、男性の耳は開き、普通に話せるようになりました。

このことから、男性の耳が聞こえなくなったのは生まれつきではなかったことがわかります。

適用

この奇跡から私たちの生活に応用できる大切な教えは、この奇跡を目撃した人々の反応に見られます。

マルコ 7:37 人々は非常に驚いて言った。「この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない者を聞こえるようにし、口のきけない者を話せるようにされた。」

人々は、イエスが待ち望まれたメシヤであると認識しました。

人々はそうだとすっかり納得したので、イエスがメシヤだと他の人に伝えずにはいられませんでした。

私たちが、マルコの福音書に登場するこの男性のような奇跡を経験していなくても、イエスを信じて愛しているなら、それはもっと大きな奇跡に遭遇していると言えます。

最大の奇跡は、救い主なるイエスと出会い、罪を赦されることだからです。

また、最大の癒しは霊の癒しだからです。

霊の癒しについて、新約聖書は、死からいのちに、暗闇から光に移されることだと表現します。

私たちが心からイエスを信じる信徒になり、「新生」を体験するなら、私たちもまた、他の人に伝えずにはいられないでしょう。

神に助けをいただいて、私たちも当時の群衆のように熱心に伝えることができますように。

3. 3 つめの奇跡では、7 つのパンで 4000 人が食事をいただきました。(8 : 1-10)

この奇跡についてまずお伝えしたいことは、6 章の 5000 人の給食とはまったく異なった奇跡であるということです。

そこには多くの違いがありますが、おもな違いは、その場面の背景でしょう。

マルコ 6 : 30-44 に記された 5000 人の給食の奇跡では、たくさんの方がお腹を空かせていましたが、その日一日出かけて来た人たちで、空腹と言ってもおそらく一食抜けただけだったはず。一方、8 : 2 を読むと、4000 人の群衆はイエスと三日間もいっしょにいて、食べる物を持っていませんでした。

ですから、この人たちは 6 章の人たちとは違いました。

この人たちは、食べ物をもろうという目に見えるご利益（ごりやく）を求めてイエスについてきただけの人たちではありません。彼らは、イエスの教えに本気で興味を持っていた人たちです。

マタイ 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

彼らは、神の国と神の義をまず求めていました。そして、イエスがその人たちの必要を与えてくださいました。

3 節でイエスは、「空腹のまま家に帰らせたら、途中で動けなくなるでしょう。それに遠くから来ている人もいます。」とおっしゃいました。

この奇跡が教える真理は、本当に飢えていた異邦人をイエスが霊肉ともに養われたということだと私は考えます。

詩篇 34:10 には、「若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、【主】を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。」とあります。

時には、神の備えをいただくために極限の状態になるまで待たなければならないことがあります。けれども、そんなときにもイエスが私たちをあわれんでくださると確信できます。

私たちが生きる現実の世界には、あらゆる問題があり、人生で直面する課題や問題を避けて通ることはできません。

しかし、イエスは、問題や苦境の只中で私たちとともにいてくださいます。

私たちがイエスを信頼することを、イエスは望んでおられます。まず「霊の食物」を与えてくださる、そして、この世の必要も満たしてくださる、と信頼するよう望まれます。

私たちがお願いする前から、イエスは私たちの必要をご存じです。

イエスは、私たちが罪の罰から解放されるために、ご自分のいのちをささげて、惨い十字架の死を遂げてくださったお方です。そのようなお方ですから、信頼できるのです。

イエスは、2000 年前に、歴史上で実際に行動を起こしてくださいました。だから今、私たちひとりひとりのために払われた尊い犠牲を、私たちは祝うのです。

偉大な賛美歌の作者チャールズ・ウェスレーは言いました。

「わが主を十字架の 悩みと死にまで追いやりまつりし…御神の愛こそまことの愛なれ」

今朝、聖餐式に与るにあたり、私たちも心から、この賛美に賛同できますように。